

大地

第 28 号
2002. 1. 25. 発行
浄 國 寺
上越市寺町3-14-10
☎0255-23-5724

指文字

山崎隆昌

記憶の中の時間の流れは早い。前任職の父が逝き二十年が過ぎた。それは裏庭にツツジの花が一面に咲き乱れる五月、享年七十一才。二十年の間いろいろの事があった。その一つ一つを思うとき、懐かしさとともに悔恨をとまなうほろ苦さを覚える。

父は、昭和四十九年つまり亡くなる七年前の六十四才の九月、甲状腺ガンが見つかり十月初めに手術した。ガンはやや手遅れの状態で気管支まで移り声帯までも摘出した。父がいよいよながら受診した日の午後、病院から呼び出しを受け医師から説明を受けた。鉛のように重い気持ちを引きずりながら家に帰り、縁側で父に、手術の必要なこと、さらに声帯をも摘出することを話したことが昨日の事のように鮮やかに想い出される。

父が退院してから三カ月ほど経過した昭和五十年五月の初旬、僕がリハビリの研修をするため日帰りで長野県の鹿教湯リハビリセン

ター病院へ職場のスタッフと視察に出る機会があった。その日の早朝六時過ぎ出たのだが、父は木々の緑葉が少しづつ色深くなる庭を黙々（声が出ないからではなく）と竹箒で掃いていた。これから長野へ出掛けると告げる僕を、父は仕事の手を休め呼び寄せ、手を出せと言う。父は差し出した手のひらに指文字で「キリ」の二文字を記した。

長野に通じる国道十八号線の妙高高原町から野尻湖の県境付近は、時に濃い霧に包まれる。「キリ」の二文字は、霧中の運転に注意せよと言うことであろう。しかしこの二文字にはその事よりも、休み休み行けとか、スピードを出し過ぎるなとか、事故を心配する父のさまざまな思いが全体として込められている。手のひらの二字の指文字から、その事を理解でき嬉しかった。

父は声を失って（食道発声法を随分熱心に練習し、一時かなりまで話せるようになったが）筆談をもっぱらとした。筆談において記される一つ一つの短かな言葉は、一般の声の会話において発せられる場合と同じ言葉でも何か違い、受け取る側は丁寧に聞くことができたと思う。筆談は文字として残るので、言葉を繰り返し味わえたいもあるが。

唐木順三の著書に「言葉について」という演題の講演録がある。この講演は大谷大学の学園祭で行われたもので、当時谷大の学生で

あった僕も聴講することができた。

講演では言葉のもつ意味、言葉の問題を沈黙との関連においてお話しされた。伊東静雄の「くさかげの名もなき花に名をいひし初めの人の心をぞ思ふ」の歌を引き、物に名が生まれること、その名が物の名として残るといふ當為の意味とすばらしさを説かれ、さらに良寛の「すべて言葉をしみじみといふべし」を受け、しみじみと、身にしみる言葉というのは、どこかで大地につながり、沈黙の大海につながっている言葉であると述べられた。一つの言葉は、広く深い沈黙の世界から発せられるという。

このように考えると、僕自身が日常において発する言葉は、良寛の「すべて言葉をしみじみといふべし」とは程遠く、軽薄で中味の無いものであると思ひ知らされるのだ。その意味で、これからも父が声を失うことで僕に与えてくれた「キリ」の指文字の沈黙を、自分の中で明確にし続けたい。

来年は父の二十三回忌である。大切な出来事として法事を迎えたいと今から思っている。

《お詫び》

寺報「大地」をお届けします。先号の「大地」が発行されて三年、お詫びするのみです。特に金井様には、二年も前に原稿を頂きながら、生前に新しい「大地」をお届け出来ませんでした。言葉もありません。

独り合点

北城町 金井信一

平成十一年十一月一日に行われた浄国寺での報恩講に参加させていただき、光源寺住職であられる堀前恵威講師より御法話を頂くことができました。今迄にはなかったのですが、資料を配布して頂き「断片々」というテーマで私みたいなものにも分かりやすく、時間の制約ある中お話しを受けさせて頂きました。

お話しは笑顔で時に冗談を交えて進められました。内容は実に身に迫るものを感じました。

《現代は人間が問われている。(物質文明の中で、自分は果たして人間か?) 本当の人間らしい心をもった人間、人間でありながら相手を道具、手段として見ていないか? 見ていけば逆に自分も道具としてみられている。》
考えれば考えるほど幅広く奥が深いような気がします。

講師の言わんとすることと違っていたり、何分の一かしか理解していないと思いますが、今日、想像もしなかったような事件が頻繁に起きていくのを突き詰めてみますと、「本当の人間らしい心をもった人間」ではなく人間の仮面を被った人間でない人間、また人間でありながら相手を道具、手段として見ている人間、つまり自我の塊で常に自己中心で、人

の心や痛みを分らない人間が増えて来ている結果のように思います。逆に自分も道具として見られているとなると、その人間どうしが何時かは弱肉強食といった結果に至るのではないのでしょうか。それが少年であろうが、親子であったり、見知らぬものに対したり、弱者に向けられたり。とても常識では考えられないことに発展してきているように思えます。こんなことを思い回らしているうちに法話も終盤となり、講師の言われた

仏様の言葉(ちようどよい)

お前はお前でちようどよい。

顔も体も名前もお前にそれがちようどよい。貧も富も親も子も息子も嫁もその孫もそれはお前にちようどよい。

歩いたお前の人生は悪くもなければ良くもない、お前にとってちようどよい。

地獄へ行こうと極楽へ行こうと、行っただころがちようどよい。

自慢する要もなく卑下する要もなく、死ぬ時さえもちようどよい。

私はこの仏様の言葉(ちようどよい)を一項づつ入念に読み「目がら鱗が落ちる」思いがしました。「ちようどよい」と悟れないところ凡夫の情けなさがあることを知り、これだけの「ちようどよい」がどれだけでも理

解できれば、理解即感謝になることがひらめきました。

「ちようどよい」と思えないところに不満が生まれ、他人のものが全て良く見え、あげくの果ては死ぬこと、死んだ先までにも欲を持つようになる。これほど不幸なことは無いと思います。

お前はお前でちようどよいということが心から理解できれば、親から貰った名前にも身体六腑にも感謝でき、自分を取り巻く家族にも、生かされて来た過去の人生にも感謝でき、死期すらも「ちようどよい」と感謝することができればと思うが無理であろうか。

「徳は積みなくても、感謝だけは積み重ねよう」

※金井信一さんは、平成十三年八月四日逝去されました。浄国寺同朋会の発案者。いろいろ教えて頂きました。感謝するのみです。

逝きし兄を想う

故 金井信一氏(妹) 上村昭子

しんしんの 雪の窓辺に 春のごとく
花匂わせし 人は今病む

患うも 記し通せし 十年誌
あくる葉月に 筆を折るとは

花を愛で 日々念佛の 兄は
浄土へ旅立つ 蓮のさかりに

先よみて かとも思える 自分史は
ファイルに厚く ワープロにて遺す

老犬ハイジと家族の絆

山崎 昌子

では、私の実家にいたハイジというラブラドル・レトリバーのお話を少しさせて下さい。彼女が家に来たのは彼女が十三歳の時でした。二歳から盲導犬として働いていたハイジは、十一歳の頃から足腰が弱り、耳が遠くなり、白内障のため自分自身の目も殆ど見えなくなり、引退することになったのでした。通常、退役した盲導犬は老人（老犬？）ホームに入ったり、有志が引き取ったりして余生を過ごします。ハイジの場合も、私が地元を離れることが決まった直前に我が家へ来る話が始まり、まるで置き土産のようだと感じながら、彼女を迎えたのを憶えています。確かに、置き土産だったのかも知れません。弟たちがさっさと家を離れ、いつまでもパラサイト（寄食）していた自分が「よし、出て行こう！」って決心したとき、正直、家族たちはどんな風に暮らしていくのかなと心配でした。別段、私ひとりがあるこれ背負っていたとか、家族が寄りかかっていたとか、そんなことはなかったのですけれど、ただ、あまりにも長々と家にいたものだから、そこで当たり前になっていた役割であるとか目に見えない atmosphere（状況）があつて、これから私がいなくなった後、どうなつてゆく

のかしらって、ふと思ったのですね。家族とは言え、他人（自分ではないという意味で）と一緒に暮らすということは、多かれ少なかれ避け難い軋轢も生じてくるでしょうし（ごく当たり前のことですが）、単純に、子ども世代が一人残らずいなくなったら淋しからうなとも思いましたし。で、ハイジは置き土産以上の存在でした。「子はかすがい」なんて申しますけれども、物言わぬ彼女が見事に家族の調整役になっていたのですね。盲導犬時代からの習慣でハイジは室内で生活していたのですが、家族がいて、そこにハイジがいる、それだけで緩衝材になっていたような観がありました。あるいは、父が散歩させるときと、祖母が散歩させるときとは明らかに様子が違っていました。父と歩いているときは「散歩しまっす♪運動しまっす♪どんどん行きまっす♪歩くのたあのしい〜！」って印象なのに、祖母と歩くときは、まるで自分が祖母を守りつつ誘導するような、きつと現役のときはこんなお仕事ぶりだったんだろうな〜って思われるような慎重な歩き方なのです。

実際、現役時代はパートナーさんと飛行機でお出かけしたり、富士登山をしたりと、かなりアクティブかつ優秀なアイメイトだったようで、そこはかとない誇りが立ち居振舞いから感じられるように思いました。

盲導犬の寿命はあまり長くないそうで、「あとのくらしい一緒にいられるかしらね」などと話すことも度々でした。

日に日に弱ってゆき、やがて歩けなくなり、体を起こすことさえ憊ならなくなってゆきました。殆ど意識を失ったような状態になり、「明日までもたないかもしれない」と覚悟を決めたこともありました。それでも、どうか厳しい残暑を乗り越え、一六歳の誕生日を迎えて間もなく、ハイジは亡くなりました。

俳句七句

山崎 睦

かさかさ と 姉の納骨 春の雲

トンネルの 先はまああるい 新樹光

高原に 来て涼風の 中にあり

僅かなる 余生楽しく 天高し

土も葉も つきし枝豆 下げて来し

蕎麦好きの 蕎麦打談義 切りもなし

聴聞の 胸ずっしりと 帰路小春

歳を重ねる

山崎慎子

アツという間に五十五才になったと時々思う。そういえば学校の先生達がよく「光陰矢の如し」とか「少年老い易く学成難し」なんて教えてくれたナァと思ひ出す。あの時は先生達の年齢に辿り着くまでには遙かな長い時間が必要で、もしかしたらそんな歳になる筈がないようにさえ思っていた。それを単に迂闊というのか呑気というのか、はたまた愚かというのか。今になれば愚か以外のナニモノでもないなあと思わされている。

女性に年齢を聞くのは失礼であるというのが当たり前になっている。男性に聞くのは失礼でないのだろうか。もしそうならばそれはどうしてなのだろう。それは、多分女は男よりもより若くその上きれいな人が歓迎される現実があるからなのだろう。

私は若い時から歳を聞かれればいつでも答えることにしていた。歳に拘わっている自分が厭だという、つまりはりっぱな拘わりによるものだった。今でもあえて歳を隠すことはないが、五十歳位を境にある変化を実感するようになった。

それまでは殆どいつでも、若い若いと言われていて、自分でもすっかりその気になっていた。逆に言えば、エーッそんなふうには見

えません、若いですわー、という反応が楽しくて私は自分の歳を告げていたような節があると今頃になって気付いている。

ところが近頃は、相手の反応は九十九パーセント実に冷静で、時には冷ややかでさえある。

以前四つ年上の姉が、電話の向こうで五代という年代が、それまでといかに違うかを力説したことがあった。その時も、へーそんなもんかいなとまるでヒトゴトのように聞いていたのだったが、今では深く深く頷くようになってきている。

昨日の朝は確かに無かったはずのシワが、今朝は目の下に、頬に、おでこにスーッと一本ちゃんんと生まれているのである。

今日の疲れがすぐには出ずに、徐々に時間差攻撃をしかけてくるようになった。

こんな具合に書いてしまうと、何だか私は加齢恐怖症に陥って悪あがきしているみたいだ。確かに心のどこかに若さへの憧れや嫉妬が居座っているけれど、歳を重ねることやと分かったことや見えてきたことにも時々気が付かされて、そんな時は、アラッ歳を重ねるっていうのも捨てたものではないなと思う。第一に「歳を重ねる」とは何と素敵な表現だろう。それに別に負け惜しみではなく、若く見られようが老けて見られようが、実年齢は動かしようがないではないか。

たまにシワを嘆き、タレ目を嘆く私に、娘が力強く言ってくれる。「お母さん、リアルな顔になろうよ。タレ目だって言うけど良いじゃない、その目はきつと相手に安心感を与えるとと思うよ。第一年相応のシワが無かったら気持ち悪いじゃない」

歳を重ねることにあれこれ思いを巡らせる私の目にある日、世界的な数学者であるハングリー生まれのピーター・フランクル氏が、両親の想い出を語っている記事がとびこんできた。それは詩やお伽話を書くのが好きだった父親が書いたフクロウの物語である。(フクロウはヨーロッパでは知恵の象徴とみなされているという)

子フクロウらが親フクロウに「人間は何歳までが若く、何歳から年をとったのだろうか」と聞く。親フクロウはこう答える「人間には過去や経験や思い出がある。また同じように夢や希望や計画がある。両方を天秤に乗せて、夢や希望、計画の重たい人は若い人、逆に過去、経験、思い出が重たい人は年をとった人だよ。若いか年をとっているかは、年齢ではないんだよ」

さて、私の天秤はどうだろう、大部分、過去、経験、思い出に傾いているようだ。天秤をせめて平衡に保つべく、今年は何に挑戦してみようかと考えはじめたところである。